

こころ学創生：教育プロジェクト

吉川左紀子（こころの未来研究センター教授）

■こころの科学集中レクチャー

2011年3月3日からの3日間、2010年度のこころの科学集中レクチャーが行われた。前年度に続き、2回目の集中レクチャーである。この教育プロジェクトは、文化心理学の北山忍先生（ミシガン大学）にコーディネータをお願いし、「こころのはたらきのもつ不思議さ、おもしろさをより深く理解すること」を目的として実施している。学部1年生からポスドクまで参加資格に制約はないが、受講希望者は、500字ほどの受講理由をつけて申し込むことになっている。講師同士のディスカッションや、講師と受講生のディスカッションの時間がふんだんにあるので、「意欲的で積極的な受講生」の参加を望んでいるためである。

■「こころの謎：文化、社会、感情、脳の密接な関係」

2010年度の集中レクチャーは、前年度のテーマを継続して「こころの謎：文化、社会、感情、脳の密接な関係」。北山先生のほか、認知科学の下條信輔先生（カリフォルニア工科大学）、神経科学の入來篤史先生（理化学研究所）を講師に迎えて実施した。受講生は、48名。レクチャーのスケジュールは3日間共通しており、午前中は10時から90分の講義と60分のディスカッション、午後は2時15分から90分の講義と60分のディスカッションである。昼食時にも議論が続くことを想定して、昼食時間もゆったりとてある。

1日目の講師は下條信輔先生、2日目の講師は入來篤史先生、3日目の講師は北山忍先生。3日間とも、午前と午後の2回のレクチャーに講師全員が出席し、レクチャー後のディスカッションにも参加する。世界をリードする先端の研究者による講義と、それに続

く講師陣のやりとりは、受講生にとって、こころの先端研究の面白さを実感する貴重な3日間となった。以下は、集中レクチャー終了後の、受講生の感想からの抜粋である。

「大学で受ける講義とはまったく違うスタイルで、知的興味を非常に刺激される内容でした。先生がたがお互いの研究内容について激しい議論をされるのを直に体験できたことは私にとって非常に貴重なことでした」

「それぞれバックグラウンドの異なる3人の先生がたによる意見交換は、今後、自身がある心理学的現象を解釈する際に多角的な考え方ができるようになるのに非常に有益だった」

「贅沢なセミナーでした。知識の伝達だけでなく、研究者としての大きな見方を聞くことができ良かったです。先生がたの知識の豊富さと研究に対する姿勢に驚かされました。ひとつの質問に対して、100個くらいの答えが返ってきてる感じでした」

■講義の概要

各講師による講義の概要は下記のとおりである。

・講義1（下條信輔先生）「意識の主観経験と行動：『クオリア』を巡って」

心理物理学、神経科学における最近の知見や現象を足がかりに、クオリア問題が少なくとも部分的には擬制問題であり、解決不能な難問に見えた仕組みそのものも、生物学的／神経科学的／言語学的制約条件から了解可能であることを示す。

・講義2（下條信輔先生）「意思決定のメカニズム～潜在と顕在、受動と能動」

講義の前半では、選好意思決定がそれに先立つ潜在的な行動／神経過程によって決定されていることを示す。後半では、脳内の神経活動の因果関係を

調べた知見に基づき「外からの感覚刺激で直接決定されていれば受動的、脳の内的要因で決定されていれば能動的」という常識的な考えが神経科学の立場からは必ずしも支持され得ないことを示す。

・講義3（入來篤史先生）「創造性の神経生物学的起源」

創造的な芸術作品では、時間・空間・意味・価値などの無数の「次元」が渾然一体と溶け合いながら魅力を放って、観る人の心を惹きつける。この創造的世界が、脳の中でどのように出現するのかを、宇宙・物質・生命・精神の起源と進化という、より大きな文脈の中で俯瞰しながら議論を進める。

・講義4（入來篤史先生）「人間知性の進化の神経生物学」

身体の構造や運動に立脚した象徴概念形成、推論／論理思考などの機能や、これらの機能にもとづいて他主体の意図や主体間相互関係の理解を担う脳内機構などについて、研究事例を紹介しながら、その神経生物学的メカニズムについて考察する。

・講義5（北山忍先生）「進化、文化、心」

進化と文化という大きな時間軸のもとにどのように人間の脳が変化し、いわゆる「文明的生活」が可能になっているのかを考察するための理論的枠組みを提示し、それを関連する実証データで検証する。

・講義6（北山忍先生）「脳の可塑性と社会性」

人は、文化という外的環境に適応（しよう）し、その過程で心理的情報処理システムも、それに介在する脳システムも変容すると考えられる。近年の文化神経科学のデータを中心にこの可能性の妥当性を検討し、脳は当該の文化の影響を受け可塑的に変容し、認知・感情・動機づけといった様々な心理過程を規定することを示す。